全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

■第1章「3・11」

7

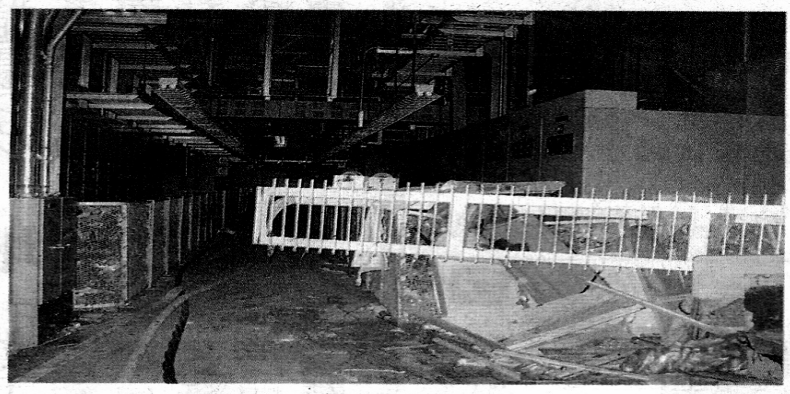
「電源設備 全滅です」

配電盤浸水、復旧は困難

福島第1原発の免震重要棟2階の会議室に復旧班のメンバーが集まっていた。どうすれば電源を復旧できるか。まずは現場の状況確認をしなければならない。送電線から高圧電流を受ける「開閉所」と呼ばれる施設（海抜35㍍）は地震で設備の損傷が激しく、復旧に数カ月かかりそうだった。

海抜10㍍の原子炉建屋付近にはまだ誰も足を踏み入れられないでいた。余震が続き、大津波警報も解除されていない。

「俺が行きましょう」。声を上げたのは池田公男(50)だった。入社以来、電気設備の点検、補修をしてきた専門家だ。ただ地震発生時、勤めに出ていたはずの妻と、富岡町の自宅にいた両親のことが気にかかっていた。何度か電話をしてみたがつながらないのだ。



福島第1原発1号機タービン建屋1階の電源設備。手前は津波で流されたがれき＝2011年3月23日（東京電力提供）

いや、今は行かなければ。池田は3月11日午後6時、同僚とともに4人で免震棟を出た。周囲はもう暗くなっていた。

徒歩で1号機タービン建屋北側の大物搬入口に近づいてみると、鋼鉄製の大きな扉が津波の衝撃でひしゃげていた。

わずかな隙間から建屋内に入り、小さな懐中電灯を頼りに暗闇を進んだ。建屋内に電力供給するための配電盤は高圧系、低圧系とも水に漬かっていた。「メタクラ」と呼ばれる高圧系には常用2系統と非常用2系統のほかに、常用と別の外部送電網から受電するSという予備系統があった。

池田は屋外に出て、免震棟にいる復旧班の磯貝拓(51)に連絡した。

「1号機の電源設備は津波で全滅です」

「何？　メタクラSもか？」

「そうです」

「うそだろ…。そいつが死んでいたらどうしようもなくなるぞ」

「でも本当にだめなんです」

何度説明しても磯貝は信じられない様子だった。池田は2号機に向かった。海側は車やがれきが散乱していて通れそうもない。それにいつまた津波が来るか不安だった。

2号機タービン建屋では低圧系の2Cと呼ばれる配電盤が床から5㌢程度、水に漬かっていたものの、かろうじて使えそうだと分かった。

再び山側から3、4号機へ向かう途中で黄色のドラム缶が5、6個転がっていた。黒い放射能マークが付いていた。低レベル放射性廃棄物だ。4号機南側の大物搬入口にはトラックが突っ込んでいてタービン建屋内の確認はできなかった。

免震棟に戻ったのは午後9時前だった。このころ東京電力本店が手配した電源車約50台が第1原発を目指していた。残された配電盤に電源車をつなぐ。それが電源復旧の唯一の方法だった。（敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信　高橋秀樹）